

# 地域とともに未来をつくる高校事例

地域に根ざした仕事や活動がしたい。地域のつくり手になりたい。本企画では、そんな生徒の思いを引き出す教育活動に取り組み、地域とともに未来をつくることに挑戦している学校を紹介します。

自分たちの島は、自分たちで変えていく。  
地域を知り地域を愛す、つくり手を育てる

八重山商工高校（沖縄・県立）

地域を知り関わることで、  
将来、行動を起こす原動力に

沖縄県の西端、八重山地方の中心地である石垣島にある八重山商工高校は、商業系3コース、工業系3コースを有する専門高校。教育方針の一つに「貢献」を掲げ、地域連携・地域貢献を通して自己の社会的な役割やあり方を深める教育を行ってきた。自身も石垣島出身の進路指導部主任・崎山錦士郎先生は、地域や学校が抱える課題や生徒の様子について次のように話す。

「八重山地域においても、少子化に伴う地域の担い手不足は課題になっており、我々も危機感をもっています。特に、地元出身の人間が積極的に参画し、地域を支え盛り上げることが大事であり、同時に現状の課題でもあり感じています。一方、生徒たちは概して地元愛が強く、進学・就職で一度島を離れても、いずれは戻

つてきたいと考えている子が多いです。地域で何をしたいのか、地域をどうしていきたいのか、地域にどう貢献できるかといったことを高校時代に深めることで、将来、島に戻ってきたときにアクションを起こす原動力につなげてほしいと考えています」

その素地をつくるためには、まずは地域のことをよく知らないといけない。そうした考えから、同校では地域に根ざした学校設定科目を多く設けている。例えば「沖縄の歴史」「郷土の自然」「郷土の芸能」「郷土の音楽」「郷土の舞踊」などがあり、選択する生徒も多い。また、郷土芸能部も多く部の員を抱え、島の行事など地域で活躍する場面も多い。

6つのコースのなかでも特に八重山の自然・文化・芸能を学ぶことに注力しているのが、商業科の観光コースだ。先述の科目に加えて「ネイチャーツーリズム」が必修科目となっており、3年間を通して英語に加えて中国語を学ぶ。

「八重山地域にとって観光業はとても重要な産業であり、観光を専門的に学んだ担い手の育成は不可欠です。距離的に近い台湾との交流もあり、中国語を身につけることはアドバンテージになるだろうと、中国語教育については30年以上前から取り組んできました。中国語の発表会やスピーチコンテストの全国大会で上位に入賞する生徒（後出の上原さん、東長田さんも受賞）や、卒業後に中国や台湾の大学に進学する生徒も出ています」（崎山先生）

深く知ること、地元愛を  
課題解決力に進化させる

観光コースでは、「八重山の伝統文化を観光資源に」をテーマに、昨年度から探究的な学びに力を入れ始めた。コース長を務める儀間政樹先生は、沖縄本島の出身者。同校に赴任した際、地元・八重山に誇りをもつ生徒が多いことに感銘

を受ける一方で、課題も感じたと言う。

「地元への誇りや愛情は強いのですが、八重山の自然や伝統文化・芸能などについて深く知らない生徒が多い印象でした。せっかく思いがあるのだから、地元のことを語れるようになってほしい、地域のために行動ができるようになってほしい。卒業後すぐにではなくても、八重山で生まれ育った子どもたちが八重山の課題を解決できるようにしてほしい。そんな思いから、生徒に探究的な学びの場を提供したいと考えました」（儀間先生）

「机上での学びだけではなく、実際にフィールドに出て、いろいろな人と出会い、話を聞いて、島の現状を肌で知ることが

写真後方左から、商業科観光コース長の儀間政樹先生、進路指導部主任の崎山錦士郎先生。写真前方左から、商業科観光コース3年の上原えりさん、宮良美都子さん、東長田千尋さん。



まずは大事」と崎山先生。今年度は、石垣市や建設会社と協働して行ったビーチクリーン活動やゴミ処理場の見学、旅行者と連携してのバスガイド実習、「スマムニ(島言葉)」の調査・発信、川平湾やバナナ公園などでのフィールドワークなど、授業や課外での体験を通して島の魅力や現状を知る機会を多く設けている。

例えば、バスガイド実習では、県外からの修学旅行生のバスツアーに観光コースの生徒らが2人1組で同乗し、ガイドを務める。道中では三線や手話も披露する予



【右】台湾の学校との交流の場で、伝統舞踊を披露する観光コースの生徒たち。【左】マーケティング部ではスマムニ(島言葉)の観光資源化に取り組む。自作のアニメーション(左下)を観光客に視聴してもらい、アンケートを実施。観光に活かす施策を検討している。

### 豊かな自然や文化を残し、島の人が活躍するまちに

「地域側にも高校や生徒との連携に対して高いニーズがある」と儀間先生。石垣島は、各種スポーツの合宿や学校の研修旅行等での来訪者も多く、そうした団体との交流会・発表会やまち案内の機会が舞い込むのは日常茶飯事だ。「学校の教育目標や方針と合致する限り、声がかればできるだけ受け入れるようにしている。その結果、観光コースの生徒たちは、内外のさまざまな人とふれあう機会が

定だ。訪れる場所はあらかじめ決まっており、生徒はそのスポットについて調べ、話す内容を自分たちで考える。現在、原稿を作成中だという観光コース3年の宮良美都子さんは、「ガイドをするために調べるなかで、石垣のことを知っているようで知らなかったんだと気づかされた。自分たちにとっても勉強になっている」と言う。また、同・上原えりさんも「地元こんな素敵なところがあったんだとわかり、石垣の魅力が観光客の方々にももっと知ってほしいと思った」と続ける。

同・東長田千尋さんは、漂着ゴミを拾うビーチクリーン活動や自然の中のフィールドワークを通して、「石垣の豊かな自然を残していきたいと強く思った」と言う。そして、ビーチクリーン活動を個人で続けている人の話を聞き、「自分に何ができるかはまだわからないけど、まずはボランティアに参加したい」と今の気持ちを語る。

多くなっている」と言う。

島内での交流に加え、研究発表会や中国語の大会などで島外・県外に出る機会もある。宮良さん、上原さん、東長田さんとも、都市部のいわゆる「キラキラした世界」を知り、少しはうらやむ気持ちがありつつも、「石垣には必要ない」と断言する。「大人たちには、島の自然や文化をもっと大切にしてほしい。ゴルフ場や全国チェーンの飲食店はいらない。こんなにきれいな海や山があるのに、どうしてそういうものが入ってくるのだらうかと思う」と宮良さん。そして、3人が共通して望んでいるのが、「もっと島の人が活躍するまちになつてほしい」ということだ。街なかの洒落た店舗は移住者が経営しているケースが少なくなく、「なんだかモヤモヤする」と言う。そんな彼女たちの言葉を、崎山先生は次のようにフォローする。

「自分たちの故郷が、知らないうちに変化させられているような感覚なのだと思います。自分たちの島だから、変えていく主体は島の人間である自分たちでありたい。そんな意識の芽生えを感じます」

最後に、3人の生徒たちに、卒業後の夢や目標を聞いた。幼い頃から三線や伝統舞踊を習ってきたという宮良さんは、「三線を弾ける人も踊れる人も減っているの、芸能の道に進み、伝統芸能を継承していきたい」、中国語が好きだという上原さんは、「大学に進学して中国語を学び、語学を活かして石垣で観光の仕事がしたい」、語学が得意だと

いう東長田さんは、「外国語大学に進学して英語と中国語を学び、空港のグランドスタッフとして働きたい。そして、いつか石垣に戻ってきた」と、話してくれた。崎山先生は、そんな生徒たちに寄せる思いを込めて、次のように締め括った。

「私たち教師にできるのは、生徒に社会、世界への扉の入口を提示すること。扉を開いてその先にアクセスするのは生徒自身であり、郷土への思いを軸足にして、広く社会全体を捉えられるようになってほしいと考えています。そして、稼ぐ力だけでなく、八重山の豊かな自然や文化の価値に気づき、大好きな故郷を守りたいという純粋な気持ちを抱いてほしいと願っています。それが、本当の意味での生徒自身の幸せにもつながると信じています」



【右】理科や社会の授業では、八重山の自然や地理を知るためのフィールドワークを実施。【左】ビーチクリーン活動の様子。同日午後には、漂着プラゴミを使ったアップサイクル商品のアイデア出しを行った。